

第1章

人間とは何か

靈性に根差した生き方

古来、日本人は、全ての存在に見えない魂や靈性を感じ、厳しくも慈しみ深い自然を崇拜し、人、そしてすべての生き物と共存し、愛と調和の中で平和な社会を営んできました。

近年の研究の進展により、縄文という時代が、豊かな風土と食に恵まれ、世界にも類を見ないほどの高度な文明を築き、1万年以上にわたって集団で人が殺しあうことのなかった平和な時代だったことがわかってきました。日本人の精神性は、この時代から、悠久の歴史の中で培われ、育てられてきたともいえるでしょう。

日本人が大切にしてきた言葉が「靈性」です。「靈性」とは、私なりには、「神仏、超越的存在、先祖、心、魂など目に見えない神秘的存在を意識すること」、つまり、無限の広がりを持つ見えない世界にあるすべてのエネルギーとつながり、自らを生かす存在に感謝す

ることと考えています。さらに、日本人は、この見えないエネルギーが、あまね遍く自然にも存在していると感じています。つまり、樹木や草花はもちろん、岩や川や山など世に存在するものすべてに靈魂が宿っていると信じてきたのです。日本人は、「靈性」という言葉のままに、見えない世界や自然に畏敬の念を抱き、亡くなった人の魂ともつながりを感じながら、脈々と命をつないできたといえるでしょう。

日本において、魂が、非科学的と断罪され、否定されてしまったのは、それほど昔のことではありません。科学が、目に見える物（肉眼や観測機器で認識できる物質）を対象にここまで発展してきたことを考えれば致し方ない面があると言えるでしょう。しかし、量子力学が登場してからのというもの、科学と目に見えない世界との関わり合いが、まったく様変わりしてしまつたのです。

では、ここで、量子力学的に見た魂について、ごく簡単にはありますが、考えてみることにしましょう。

量子力学の分野においては、「二重スリットの実験」の登場が、新しい時代を拓くことになつたと言われています。その内容の詳細については省略いたしますが、ご興味があれば『量子力学で生命の謎を解く』（ジム・アル＝カリーリ、ジョンジョー・マクファデン著）、『タマシイはひたすらびつくり体験とわくわくアイデアだけを求めてあなたにやって来た！』（池川明、長堀

優著などをご参照ください。

この実験により、確認されたことを一言でいうなら、素粒子（物質を構成する最も基本的な単位）を観測しようとする、一つの粒子である「物質」として振る舞うのに、観測していないときには、空間的な広がりをもつ「波動」になってしまう、という不思議な現象でした。

わかりやすく言えば、いつもは、「物質」としての実体があやふやな光の玉が、人間が観測しようすると、突然小さなボールに変わるようなもの、といってもよいでしょう。肉眼的に確認できる世界では、到底ありえないことです。その上、あたかも人の意志を読み取っているかのような素粒子の振る舞いにも、たいへん驚かされます。

しかも、何千回となく繰り返し返され、実証されている「二重スリット実験」の結果を疑う物理学者は、信じがたいことに、もはやどこにもいません。この実験により、従来の物理学的常識が、根底から覆されつつあるのです。

古典的な物理学では、宇宙で起こるすべての事象は「物質」によって起こされると考えられています。ですから、宇宙を構成する究極の「物質」とされる「素粒子」も、あくまでも「物質」でなければなりません。

まさか、「素粒子」が、「物質」としての実体はつきりしない「波動」として振る舞うなど、

それまでの科学的常識では、まったく考えられないことだったので。

なによりも、「波動」や「物質」が、観測者の意志を推し量るなどということが、どうしてあり得るのでしょうか。

でも、「二重スリット実験」が示した事実に基づいて考えるなら、「その存在に気づいたり、意識を寄せることにより、エネルギーが粒子に変わる」、さらには、「人の心次第で、エネルギーから物質が生じる」という仮説も、頭ごなしに否定できなくなってくるのです。

この結果について、量子力学の生みの親であるマックス・プランクも、「意識は物質よりも根源的で、物質は意識の派生物に過ぎない」と驚きを持って受け入れています。

この論理をそのまま解釈するなら、物質と意識の因果関係は逆転します。

つまり、もし意識が現実を生み出しているならば、意識が脳という物質を生み出す、ということにもなります。であれば、肉体という物質が減しても、意識まで一緒に消滅することはない、すなわち、死んでも意識は残る、と読み解くことも、決して不可能ではなくなってくるのです。

では、意識、魂と身体の関係はどうなるのでしょうか、この点については、この章の後半で、矢作直樹先生が、「素領域理論」に基づいて説明されますので、ご参照のほどお願い致します。

もちろん、以上のことは、あくまでも、ひとつの解釈の仕方にすぎません。しかし、「魂などあるはずがない、死後の世界など非科学的」というこれまでの常識が、はたして正しいのか、と疑うことは許されるはずです。

この前提のもとに、さらに話を進めましょう。

魂を意識し、「靈性」に根差した生き方をすれば、私たちを活かす大いなる存在に思いが至り、生かされていることへの感謝、謙虚さが生まれてきます。そして、エゴが縮小し、他者との違いを素直に受け入れられるようになり、周りとの連帯感が増してきます。価値観の大転換が起きるのです。

私は、前作『日本の目覚めは世界の夜明け』を通じ、靈性を靈性と表記しました。旧字体の「靈」の字は、3人の巫女が、雨雲にむかって雨乞いをしている姿を現すとされており、天、宇宙と意識をあわせていた日本人がいにしえより馴染んできた精神性そのものです。残念ながら、この靈性をオカルトと断罪してなおざりにし、経済効率や物質の豊かさを追い求めてきた現代社会は、人々に心の安定をもたらすことはありませんでした。

有史以来、地震や台風、火山の爆発など、この日本列島は、全てが失われるような数々の激烈な自然災害に翻弄されてきました。ここで生き抜くには、日本人は、繰り返し返される苦難を受け入れ、ともかく耐え忍ぶしかありませんでした。その中で生まれた「仕方ない」

時です。

自分の正しさを主張し、言い負かすのが勝ちの外国人には理解しがたい言葉なので「す」

日本人が持つ受容の心を見事に表した言葉が「仕方ない」であり、この「泳える」であると言えるでしょう。このような外国語には訳しがたい言葉、日本人の美しい感性が編み出したかけがえのない言葉とともに、受容の精神が、日本人の意識の奥深くにまで染み込んでいるのです。

裏を返せば、その心根は、常日頃自分を生かしてくれる大いなる存在への絶対の信頼と感謝を捧げる「おかげさま」という言葉に集約されます。私たち日本人は、「おかげさま」に感謝を捧げ、主語のない日本語の中で育ち、エゴの意識を縮小させながら、謙虚さを美德として命をつないできたのです。

そして、私たちを生かす偉大なる存在が間違えたことなどするはずがない、という全幅の信頼感こそが、どんなことがおころうとも、パニックになることなく、「仕方ない」と受け入れる態度につながったともいえるでしょう。

日本人には、ある種の「達観」があるとも言われます。決して揺らぐことのない、日本

人の精神の支柱とも言うべきこの「達観」があるがゆえに、さまざまな外国文明を愛容させ自国に取り入れながらも、民族の魂の中心線はいささかも揺らぐことはなかったのです。この「達観」を生み出すものが、「おかげさま」への絶対的な信頼感であり、これこそが、日本人の根源的な宗教心と言つてもよいのではないかと私は考えます。

幾度となく襲つてきた過酷な自然災害の体験から、日本人は、生きていることは当たり前でないという事実に気付かされ、生かされていることに感謝をするようになりました。近年続く激甚災害を通じ、日本人が本来持つているはずの感謝と謙虚さが、いま再び、呼び覚まされてきているように私は感じています。

この一瞬に生きていることはそれだけでものすまいことなのです。生かされているという奇跡に感謝し、私たちを生かしてくれる存在を心から信頼する、この心の持ちようこそが、死と向き合うことで生が輝く、まさに「生死一如」の教えそのものです。

「生まれ 生まれ 生まれ 生まれて 生のはじめに暗く、
死に 死に 死に 死んで 死の終わりに冥し」

空海の書『秘蔵宝鑰』冒頭の一節です。

人は、数えきれないほどの輪廻転生を繰り返しているにもかかわらず、なぜ生まれるのか、なぜ死ななければならないのか、という人生における根源的な問いに答えることはできません。何回生まれ死のうとも、人生の真理を考えようとしなのが人間である、空海のこの言葉は、物質文明にまみれて生きる私たちの姿を、見事に言い当てています。

この一生を生き抜く意味がわからなければ、人生の荒波に翻弄され、迷い、疲れ切り、最後は死の恐怖に苛まされながら、無明の暗闇の中で命を終えるだけです。

この人生の闇を、一転光に溢れた道に変えるのが、靈性に根差した生き方です。つまりは、目に見えない世界と繋がり、永遠に続く魂を意識し、今この瞬間を充実させる生き方です。永遠の魂を見据えれば、死は単なる卒業に過ぎません。決して恐れることなく、悠然と受け入れることができるはずでです。

魂を意識すると、人生に起こるさまざまな病気や苦難はその意味合いをガラッと変えていきます。というのも、過酷な出来事も、永遠の魂を磨き、輝かせるための試練であり、苦難を乗り越えてこそ初めて体感できる人生の真実があることに気づくからです。今生において何を為すべきかについても考えさせてくれることでしょう。

考えてみれば、人生における幾多の楽しみも受難も、この肉体に魂が宿るからこそその体験です。悲喜こもごものさまざまな経験を積むために、私たちは、この地上で肉体を持つ

た生を授けられているともいえるのです。このような見方をすれば、病気に対する考え方や向き合い方も変わり、身体のバランスにも、必ずや良い影響を与えてくれるはずで

見えない世界への気づきは、個人の健康を越え、地球に生きる生命体すべての調和、幸せをもたらす生き方も示してくれるに違いありません。

日本人の遺伝子に組み込まれた「愛と調和と受容、分かち合い」の精神は、物質的にも精神的にも行き詰まった現在のこの世界に、必ず必要とされてくるはずで

した時代に、日本人の生き方は、未来を拓く手がかりを与えてくれることでしょう。

競争に明け暮れ、殺伐とした社会に翻弄され、心奪われているうちに、私たち日本人の精神は擦り切れ、本来の自分の姿をすっかり見失ってしまったようです。もともと日本人は、愛と感謝と受容の精神にあふれた民族であったはずなのです。

「家であれ国であれ、過去の御陰様を忘れて栄えた例たぬしはない」

薬師寺の管長を務められた高田好胤氏の遺された言葉です。私たち日本人が、決して忘れてはならない重い戒めです。

日本人が、「仕方ない」「おかげさま」という心持ちとともに、大いなる存在に限りない感謝を捧げながら、この列島の上で生き抜いてきたことを、今こそ思い出す必要があるのです。

永遠の魂を視野に入れれば、生き方は前向きになります。医療においても、看取りが癒しに溢れたケアに変わることでしょう。医療の対象も、時空間や物質を超え、前世の記憶によるトラウマや、体を取り巻く見えないエネルギーへと大きく広がっていくことでしょう。そうなると、医療のあり方は、現在とはまったく様相を異にします。普段の体調を整えたり、予防に重点を置いたり、食に配慮したりと、もっと人に優しいものに変わっていくはずですよ。

ダライ・ラマ法王は、「日本ほど祈りの場が多い先進国は他にない、21世紀における日本の役割は大きい」と日本人への大きな期待を明らかにしています。我々日本人は、このような大きな期待に応えていかねばならないと思います。世界が追い込まれ疲弊している今こそ、我々は、日本人本来の精神を思い出し、新たな行動を起こしていく必要があるのではないのでしょうか。

ピーター・ドラッカーは、次のように語ります。

「混沌とした時代において最も危険なのは、混沌そのものではなく昨日と同じ論理で行動することだ」

この言葉は、今の時代にまさにふさわしいと感じます。西洋的な物質主義主導の文明が

極まり、先の見通せない世情の今こそ、靈性とともに、魂を見つめなおして、東洋的な古来の生き方を思い出し、世界に広げていくことが必要なのです。これこそが、現代に生きる私たち日本人の使命なのではないかと考えます。

私は、まず我々が行うべきことは、価値観を目に見えるものから目に見えないものにシフトさせることです。言い換えれば、俗世的な金、物、名誉などではなく、心の豊かさを求めて行動することです。その心の豊かさとは何かといえ、人のお役に立てるような利他の行動に、心からの喜びや高揚感、ワクワクを感じることに他なりません。

潜在意識の根底にある仏性と繋がる魂が、真に求めるものは、お金や名誉ではありません。魂は、真に愛し、愛されることで、つまり、利他の行為を実践することで喜び、元気になります。利他の実践は、個人の健康のみならず、健全で暖かい社会の育成にもつながります。暖かく、愛にあふれた社会が形成されていけば、個人の魂の成長・進化はさらに促進され、心身の健康も格段に向上していくことでしよう。

皆の意識が少しずつ変わり始め、利他、愛に気づく人が増え、他人への奉仕、気遣いといった態度が尊重されるようになると、人心の荒廃、環境の悪化といった深刻な問題も、必ずよい方向に向かい始めるでしょう。日本人にとっては決して難しいことではないはずですが、今、私たちに必要なことは、大自然、ひいては宇宙につながっていた古来の生き方を思

い出すことです。太古の昔より、日本人が大切にしてきたのは、協調性や分かち合いの精神でした。そして、縄文時代は、力による征服や支配のない争いのない世界でした。そこでは、目に見えない心の喜びが尊重され、人々は、恐れとはほとんど無縁であり、深い満足感や安心感に満たされていたのです。

宇宙に在るのは、単に作用と反作用、ないしはプラスとマイナスにすぎません。どちらにも本来良い悪いはありません。両者あってこそエネルギーが流れるのであり、どちらも宇宙の活力の根源と言ってもよいでしょう。その二極に善悪という意味付けを行ったのは、人類の意識にすぎません。

宇宙にネガティブなことがないのだとすれば、縄文の文明や精神が破壊され、物質文明が極まっていく過程は、日本人にとっても人類にとっても、悪いことではなく、単に経験を重ね、意識の幅を広げ、その深みを増していくための不可欠な過程であったということになります。個々の人生においても、困難、苦難、試練は、魂の目覚めや成長・進化の機会です。この人生における真理は、危機に瀕した地球に生きる今の人類にとってもまったく同じことでしょう。

これまでのすべての経験を生かすためにも、人類はこの先もしっかりと生き抜いていかなければなりません。そのためにはいまこそ価値観の転換が必要なのです。すなわち、目

に見えるものから、目に見えないものへの価値観の転換です。

私たちは、明日の命など全く保障されていないことを、今一度肝に銘じましょう。死んだら、この世で目に見えるものは何も意味はなくなるのです。

その一方で、目に見えない心の豊かさは、自らの魂を磨き、肉体が減びても何らかの形で連綿と残っていきます。日々、この一瞬一瞬に利他の実践を続けることが、「後悔を残さない、生き切る」ということです。そして一日一日を大切に、後悔を残さず生きていく姿勢が、穏やかな死の受け入れにも繋がっていきます。

死が間近になった患者さんが抱く感情で、最も多いのは「やりたいことをやっておけばよかった」という後悔です。しかし、その後悔は、実は、本来明日をも知れぬ身であるはずの私たちが、今のこの一瞬に感ずべきことのはずです。

先のことを心配しすぎたり、周りに気兼ねして、自分が本来行いたいことを我慢する生き方は、あとあと後悔を残すことになりかねません。

人の考えを変えることは難しいですが、自分を変えることなら出来るはずです。まず、自分が愛・利他に基づいて行動し、自分を生かす大自然に、そしてこれまで命をつないでくれた先祖に感謝を捧げ、自然との調和を目指すことです。もちろん、愛と調和の心に溢れた人々が暮らす、この美しい国、日本に生まれたことへの感謝も忘れてはならないでしょ

う。

分かち合いと感謝の心で行動する人が増えれば、周りが変わり、地域そして必ずや社会も変わることでしよう。

なにより大切なことは、自分がワクワクし、他人も喜んでくれることは何かをもう一度考えてみることに、もし思いついたら俗世のしがらみなど気にせず思い切って実践することです。かけがえのない我が人生を、喜びと共に思い切り生き抜くことができれば、誰もが輝けるのです。良く生きることイコール良く死ぬことです。充実した人生を過ごすことができれば、いざという時も後悔なく潔く旅立てることでしょう。そんな人生を多くの人が送れるようになったら、必ずや、現世の涅槃が実現されることと思います。

日本に、そして世界に、希望に満ちた未来が訪れることを、私は心より願っています。

生きることの本来の意味・人間の使命（肉体での学び）

拙著『人は死なない』（バジリコ）などの著作を通じ、人の生命の不思議さから、創造主の天壤無窮の「摂理」の一端について述べてまいりました。この「摂理」を理解することで、人がこの世での使命を知り、高次元と繋がり、大いなる安堵と幸福が得られることに気づいてもらえればと願ったのでした。

さて、拙著で述べた「摂理」ですが、具体的には中今を意識することで感じ取れるのではないかと思います。一生懸命に考えたあげく今に意識を集中することで高次元世界と繋がりが、どうしたらよいかということがイメージとして感じられるのではないのでしょうか。

さて、ここで「摂理」や他界の理解のもとになる高次元世界について述べます。

湯川秀樹博士が晩年に提唱された多次元世界を説明する「素領域理論」について述べます。初めに完全調和の世界があります。これを神の世界とします(図1)。図ではなにもないようにみえます。この完全調和の世界にさまざまな次元の広がりを持つ泡のような素領域(3次元あるいはそれ以上の次元の泡、2次元の面や1次元の紐など)ができました(図2)。この泡・平面あるいは紐の数については確率論のポアソン分布



図1

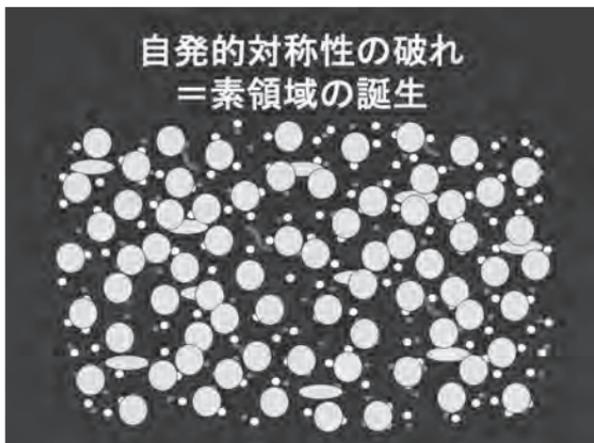


図2